

2020年4月3日

## 2019年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する( )に ○を付ける	・共同研究(○)      ・個人研究( )	
研究代表者 (所属・職・氏名)	家政学部・教授・本澤淳子	
研究課題名	小学生を対象にした地域教材の開発及び活用に関する実践的研究 — 「千代田区ふるさとカルタ」の構成・発信 —	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
深津謙一郎	文芸学部・教授	研究計画立案、専門的知識の助言
研究期間	2019年4月1日 ～ 2020年3月31日	

### 研究実績の概要(1)

本研究は、2016年度から3年間にわたり本澤ゼミの研究活動として推進してきた「小学生を対象とした千代田区の地域素材の実践的研究」に基づくものである。この研究によって構成・発信してきた「千代田区ふるさと検定」の活用の在り方を明らかにすることが本研究の目的となる。

「千代田区ふるさと検定」は、HP版及び冊子として発信しているが、特色の一つとして、それぞれの検定問題の終わりに「ここで一句」を設定していることが挙げられる。これは、検定問題で取り上げた内容をより印象づけるために設けたものであるが、この句を読み札としたカルタを構成すれば、検定問題と連動するカルタとすることが期待できる。検定問題は、多くの自治体から発信されているが、発信後しばらくすると枯渇していく状況が目立つ。これは検定問題発信後の利活用について積極的な計画運営がなされていない場合に多く見られる。検定問題に即したカルタを構成・発信することにより、検定問題やカルタが、地域住民に親しまれるコミュニケーションツールとして活用されるようになるであろう。

本研究において最終的に構成・発信しようとする「千代田区ふるさとカルタ」は、こうした研究経過をふまえたものである。

#### ① 4～6月 カルタの読み札の内容、表現を検討する

前年度までに作成した検定問題は、全75問である。この75問のそれぞれに「ここで一句」が設けられているが、これをカルタの読み札にするにあたって、精選、調整が必要となる。検定問題の「ここで一句」は、冒頭の音が五十音となるよう意識して構成されたものではないので、音の重複、欠如があり、この調整が求められる。また、75句の中から、五十音に照応する44句に精選する必

要もある。

このカルタを使用するのは、地域の小学生が中心となることを想定しているが、「千代田区ふるさと検定」は幅広い世代に楽しんでいただいている実績もあるため、だれもが理解でき、親しめる表現とする必要がある。また、区内の歴史、文化等を地域によって偏りのないよう取り上げ、カルタを楽しむ方々により親しみを感じていただけるような配慮も必要である。このような点を基本としてカルタの読み札を構成した。読み札の表現については、共同研究者である深津教授に助言をいただくほか、本澤ゼミ内において検討を重ねた。

② 6～12月 カルタの絵札をデザイン、作成する

昨年度までに本澤ゼミで撮影してきた画像データから、絵札に適した画像を選定する。

選定した画像をもとにイラストを依頼する。イラストは、千代田区交流活動「ちよとも」の小野晶子氏に依頼した。小野氏と絵札のイメージを共有し、試作の絵札について意見交換しながら読み札の内容と合致する絵札を作成した。

③ 1月 カルタの解説書等を作成する

ゼミ生が中心となり「千代田区ふるさとカルタ」の解説書を作成、外箱については小野氏に依頼して作成し、昇文堂に印刷発行を依頼した。

④ 2月 区内の学童クラブにおけるカルタ大会を企画運営する

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、計画していた発表や実施の中止を余儀なくされたが、ポピンズアフタースクール一番町におけるカルタ大会は、流行前の時期（2020年2月19日）であったため実施することができた。

このカルタ大会には、小学校1～4学年の児童約30名が参加した。4グループになり、ゼミ生が札を読み上げていくと、どの児童もカルタ遊びに夢中になる姿が見られた。絵札を見て、「日比谷公園だ、行ったことがある」「これは四谷見附橋だ」などと歓声が上がり、自分たちが知っている地域の歴史、文化、自然等がカルタに表現されていることに関心を示していた。また、学童クラブ施設長からは、「学習や校外学習等で親しんでいる内容なので、千代田区の子供たちのだれもが楽しめる」と評価してくださった。

当日の様子は、毎日新聞 web 版「大学倶楽部」2020年3月10日付に掲載された。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

2019年度(第27号)総合文化研究所紀要に研究成果を発表予定(現在執筆中)